夢追い人
Dreamer's only

「大川仙助紅白」で全国大会総合優勝したい

大川錦鯉センター 代表者 田中 利明さん

田中利明さんは、大川錦鯉センター三代目。会社の創業は一八九〇年頃、ほぼ一二〇年の歴史を持つ。食用の黒鯉の養殖から始まり観賞用の鯉を養殖する事業に発展してきた。世界数十カ国からバイヤーが訪れる。アメリカ、ドイツ、イギリス、ベルギー、香港、アフリカ諸国からも…。実に出荷の七割が輸出。この傾向はバブル崩壊後顕著になったという。

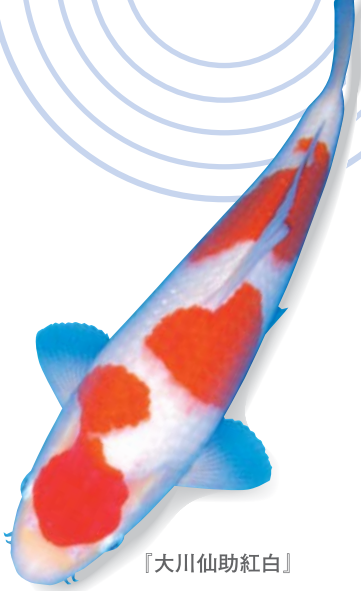
大川錦鯉センターの主力は、なんといっても田中さん自身が開発した、ブランド「大川仙助紅白」。紅白の色合いがシャープな、美しい錦鯉である。

「大川仙助紅白」を作り出したのは四十年ほど前。

開発に至った経緯を聞いてみた。

「東京オリンピックのあった一九六四年でした。十八歳で親の後を継ぎ、良い鯉を作りたい！との熱意に燃えていました。それでトラックで錦鯉の本場新潟に出向いていったのです。当時は高速道路もなく、一〇〇〇キロ以上国道を走り続けました。新潟に入ると、砂利道が多く、雨が降って坂を登らないことがしばしばで、苦労した記憶があります。」

しかし、旅の疲れを吹き飛ばす様な鯉に出会えた。「宮寅養鯉場にいた仙介紅白のメスでした。六十五センチという大きさは当時では異常に大きいもので、緋は、真っ赤で、白地もよく、美しい鯉でした。



『大川仙助紅白』

その風格、美しさに惹かれてしまいました。そのときこれで、日本一の錦鯉を造る決意をしました。」

そして全日本錦鯉振興会第一回東京大会で農林大臣賞を作った岩間木の三九郎系統のオスと交配させ、作り出したのが、「大川仙助紅白」の始まり。

「体型のよさと特に白地の良い錦鯉を目指し交配を繰り返し品質の向上を図って来ました。それが今の『大川仙助紅白』です。」

大川仙助紅白は錦鯉品評会で優秀な成績を収めている。たとえば、第一回全国若鯉品評会では大川仙助紅白で総理大臣賞受賞、第十二回九州地区総合錦鯉品評会では六十五部（六十から六十五センチ）で、総合優勝。二十五部では、優勝、二位の成績を収めている。

さて、業界で御三家と言われるのは、紅白、大正三色、昭和三色。大川錦鯉センターでは、昭和三色、大正三色も、もちろん育てている。

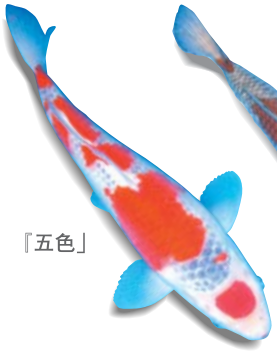
「昭和三色は、黒地の中に白と赤模様がある、渋い感じの雰囲気。大正三色は白地の中に赤と黒が混じっている、明るい色合いの鯉です。」

『昭和三色』

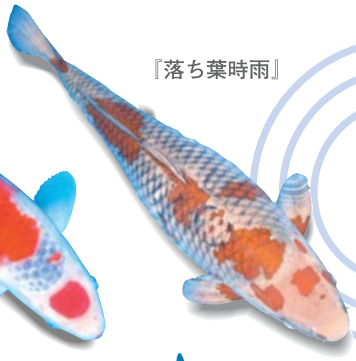
『大正三色』

これらも優秀な成績を収めている。たとえば、（社）全日鱗九州地区第一回若鯉品評会で、昭和三色が全体総合優勝。第三十三回全日本総合錦鯉品評会では、大正三色が六十五部で優勝している。

外国人に人気があるのが、『五色』。赤地の中に白、藍色、黒、中間色が混じる。そしてもうひとつ。『落ち葉時雨』。黒地に黄色い模様が入ります。鱗目がきれいです。それから日本の業者にいま人気があるのが、『白写』。稚魚の時は、真鯉の様だが、成長すると共に色が加わってくる。



『五色』



『落ち葉時雨』

さて錦鯉を育てる際、大切な要素は何だろうか。「水の環境を良いものにすることです。それにはまずｐＨを弱アルカリに保ちます。エアーを送って溶存酸素量を適切にすること。また水温を二十三度から二十五度の間にすることです。そして大川錦鯉センターでは、バクテリアを使った水の浄化システムを使っています。」

『白写』

さて、もう一つの質問。優秀な錦鯉を造る秘訣は何だろうか。

「稚魚の時、選別をします。この段階が一番大切です。そしてそのとき求められるのが”鑑識眼”です。これにかかっていると言っても過言ではないと思います。優秀な錦鯉を生産できる人は、間違いなく”鑑識眼”があります。」

バクテリアを使った浄化システム

では、鑑識眼はどのように養われるのだろうか。「経験と良い鯉を沢山見ることだと思います。長男と次男には、学校を休ませて、小さいときから各地の全国大会、品評会には必ず連れて行ってました。今この二人は、鑑識眼の点では私より上かもしれませんね。」

夢は何だろうか。

「体長一メートル位の「大川仙助紅白」で、全国大会で総合優勝することです。いまそれを狙える、優良な鯉が育っていると思いますから、期待しています。」

稚魚